

小尾十三の世界

白倉一由

一

山梨の小説の成長は山梨日日新聞の月曜文壇・サンデー文壇に負うところが大きかったが、昭和十年代の「中部文学」によって独自の展開がなされるようになった。これによった作家の幾人かは全国レベルに達したのもいたが、山梨県で小説界において全国的に知られるようになった作家に小尾十三がいる。

小尾十三は明治四十二年十月二十六日北巨摩郡穂足村大豆生田に小尾角太郎、はなの四男として生まれた。父は農家の末男で国定教科書販売を営み、母は漢方医の娘であった。大正元年父は破産し、甲府に移住して暮会所を始めた。母は遊び人相手の父の業を好まず、子供への影響教育を考え、甲府市郊外の善光寺の北側に子供四人を抱えて別居し、小作農になり、養蚕で子供を育てた。大正十二年甲府商業学校に入学するが、一年終了で退学する。大正十三年長野鉄道局教習所へ入所。以後、職を点々とする。共産党の影響下の全農支部青年部書記などもする。左翼退潮と共に組織が崩れ、母が借金してきた十七円を貰い上京し、貿易商その他に点々と勤務する。昭和

和九年朝鮮総督府通信局に勤務。在京中正則英語学校夜間部に学び、実検商業科の免許状を得たが、警察の身上調査によって全国どの学校にも就職は不可能となった。昭和十四年朝鮮の元山公立商業学校の教諭になり、昭和十七年新京中央放送局に就職した。

昭和十八年森永製菓の満州本社の創設と共に経理課長となったが、朝鮮の元山公立商業学校の教諭だった当時のことを回想して小説「登攀」を書く。京城の詩友であった安部一郎氏が、京城に送ってみないかといわれたので送ったところ崔載端によって刊行されていた京城帝大系の同人雑誌『国民文学』に昭和十九年二月発表された。日本では同年十二月『文藝春秋』に再録された。岩倉政治はこの小説を激賞し、友人の横光利一・川端康成に芥川賞候補に推してくれと頼んだので、昭和十九年上半年第十九回芥川賞を八木美徳の「劉廣副」と共に受賞したのである。

この二つの作品は当時の時代を反映したものであり、「この二編は正しく今日書かれなければならぬ作品を作者がこれほど熱を持って書いたのがまず珍重である」と評されるにふさわしいものであった。昭和十八年文藝春秋社が満州に別社を作り永井龍男・池島信平

氏等が創設に当たり、昭和十九年『芸文』を刊行したが、それに「雑巾先生」を発表する。「登攀」「雑巾先生」はその後「形見」「浪花節」と共に単行本『雑巾先生』として刊行される。この刊行は満州文藝春秋社によるもので康徳十二年（昭和二十年）二月五日に発行され、発行者は小松正衛であって、当時小尾十三は新京特別市祝町一丁目三の一に住んでいた。昭和十八年文藝春秋社が満州に別社を作るため永井龍男が池島信平・徳田雅彦・千葉源蔵・小松正衛を引き連れて渡満した。翌年秋、香西昇と式場俊三が池島信平・千葉源蔵と交替し、結局『雑巾先生』の刊行は式場俊三が中心になって刊行し、彼が本の題字・装幀などを行った。

初版は五千部刊行、再版本は康徳十二年七月十五月初版本と同じく五千部刊行し、定価は四円であり発行者は式場俊三であった。

『雑巾先生』は初版再版共によく売れた。初版再版各五千部という部数は当時の文芸書としては珍しいことであった。当時日本は紙不足に加えて印刷所の機能も低下しており本の発行は思いどおりにならない状態であったのに比べ、満州は比較的出版事情が良かったからだと思う。

初版再版各五千部刊行されたが、日本には一冊も存在せず長い間幻の芥川賞本とされていた。第二次世界大戦の敗戦によるソ連軍の進駐の満州の惨状は大変なものであり、自分の生命を保つのが精一杯であり、小説など持ち帰ることなど思いも寄らないことで、満州文藝春秋社の在庫も焼き払われたのではないかと思う。小尾十三が満州から引き揚げてくるときリックサックの奥深く仕舞い込んで持ち帰ったものが、唯一のものであった。それは現在山梨県立文学館に保存されているが、初版本は元の表紙が表裏ともなく、代わりに

厚紙で簡易補修されており、再版のものは末尾の数ページが欠落している。

「登攀」は小尾十三の自伝小説である。彼が朝鮮の元山商業学校に勤務したときの体験を書き綴ったものである。

元山当時、商業学校の担任の生徒が共産党事件で検挙されましてネ、それを扱った小説です。……妻などは情で愛す型ですが、登攀の主人公は私が理的に愛した唯一の人間です頭の中の交通整理ができていて、キレイに磨き上げたような頭脳。心から民族の幸福を願っていた生徒でした。あのころ既にロシア語を習い戦後は北鮮で通訳をやっている筈です。彼は今どうしているか、もし生きていて会える機会があるなら、昔のままの気持ちで会える男です。⁽²⁾

小尾十三は田野辺薫に「日本政府は、戦争遂行などのために朝鮮人を駆り出すだけで、朝鮮人にたいして権利を与えようとはしなかった、そうゆう不当な扱いにたいする公憤からこの作品を書いた⁽³⁾」と言っている。小尾十三は当時の日本政府の朝鮮政策に対して彼独自の考えで書き、朝鮮人を当時の日本の思想の中で捉えるのではなく彼自身の考えの中で書こうとしたのである。

「登攀」の主人公は教師の北原邦夫と生徒の安原寿善であり、この二人の織り成す人間模様である。十月中旬新京の中学校の教師をしている北原邦夫のところへ、前任校の朝鮮の中学校の教え子安原寿善から思想問題で捕まったから救い出してくれとの手紙が来る。

前任校の朝鮮の中学校は内鮮共学で安原寿善は朝鮮人で北原が二年から四年まで担任したクラスにいた。北原は初めは安原寿善の存在を意識していなかったが、個人的に接触するようになったのは不意

に家庭訪問したことから始まる。彼は妹の看病をしていた。北原は妹のために無料の医者を手配してやった。安原寿善は初めは馬鹿笑いしたり、反抗的態度であったが、次第に変わり親しくなっていく。夏休みの終り頃北原は海水浴に行き偶然寿善と一緒に彼の家族のことについて聞く。父は亡くなり、彼は母と妹とで叔父の家に寄食している。母は生来の怠惰な性格で叔父の家での小作人同様の生活に辛抱できずに、権平沢の援助で酒場を開き、ついに駆け落ちしてしまふ。寿善は叔父に中学にいれて貰うが、母が恋しく連れ戻す。翌年の一月朝鮮人生徒間に思想団体が発覚し寿善も連座していたが、警察の調べでは無実であった。北原自身の私生活にも問題が起こる。妻との性格の不一致と妻の不貞で遂に離婚することを決意する。北原が寿善を誘って二人で金剛山に登ったのはその頃であった。頂上の直立百米岩石にへばり着いた鉄梯子を吹雪の中を登って行った。寿善は感動し、闘っていれば光明を得る人生の教訓を得たと語る。

北原は妻との離婚が成立し、そのことが原因で満州の中学へ転任することになる。寿善は京城帝大予科を受験する日、権平沢が訪れ母を連れて行くと言う。母は行きたいと泣き叫ぶ。叔父は働き手を失うのでゆるさないが、母は権平沢と妹を連れて出ていく。寿善は遂に叔父と義絶する。

北原は満州の中学に行ってしまった後、思想問題で捕まった彼のために手紙で尽力する。寿善は釈放される。寿善からの二通の手紙が来る。最初のものは死んだ母への愛が語られ、母のもとに行きたいとの絶望的内容であったが、次のものは生きなければならぬとの再生の意識のあるものであった。以上が「登攀」の内容である。北原は末席の教師であったが、教師としての生き方を慎重に考え

ていた。当時の朝鮮における教育は内鮮一体の教育、朝鮮の日本による皇民化の教育であった。教育は教師と生徒との関係においてなされるのだが、北原はこの関係のあり方を人間的あり方でなければならないと考えていた。

ある生徒だけを熱愛する危険が、なきにしもあらずだからである。……より公平に、より深く愛すると言うのが目標

彼は朝鮮人の生徒を愛そうと心がける。愛薄きものをより強く愛したいと思っていた。北原は金剛山に登るのに相手が欲しくそれを生徒から選ぶのだが、朝鮮人の寿善を選んだ。日本人を選んだ場合には犯罪意識を感じるのに朝鮮人の場合にはそれがなかった。しかし相互に心温まる相手というものは朝鮮人にはなかった。

上級朝鮮人の虚無的哄笑は、相手が制裁力なしと見える場合、実に巧みに機会を捉えて放たれ、北原はその度に背筋を走る冷たいものに身震いするのであった。

朝鮮人のこのような態度について、怒って一時の鎮静さを得るが、何の教育的効果のない虚しさを感じるものであり、何時も権力の塊のような冷たい装いを続けなければならぬ、性格が変わっていく怖れを感じるのである。北原は自分の担任の生徒だけはそうした影響から護り防ぎたいと念じて努力している。現実の悩みを持った教師の実態が書かれている。このような現実に対して彼は彼なりの処世観を試みようとする。小尾十三は基本的な教育観を考えようとし、その方法を苦慮し問題視したのである。

その実態は盲目的な朝鮮人への愛情の告白である事を彼は鋭く見抜いたからである。愛情も盲目的では、殊に彼等の場合由々しい問題に発展する……目明きの愛情はどういう途を歩んだ

らよいか、北原自身模索の有様なのだった。

国策としての教育観は理解しているが、北原は彼自身確たる教育観があるのではなく、また信念が有るわけでもなかった。現場に来て戸惑いを見せるが、朝鮮に来て教職につき実際に内鮮の生徒を担当してみても初めてその重要性に気付く。

二十万余の朝鮮人ノ精神にとつて抜き差しならぬ重大問題であるばかりでなく、一億全日本人の根本的重大試験である事を悟ったのである。

個により民族を国家を知るのであるが、大切なのは個であつて歴史の強引な力に牽かれるのであつてはならなく、個の信念の正しい確立が望まれるのであり、そこに無限の希望と歓喜とがある。彼は究極的に結論を導き出すのである。

そうだ。愛だ。慈しむ事だ。彼の得た結論はそこであつた。

人間の基本的問題は愛であることに彼は気付く。寿善は理由無く反抗したのではなかった。心の純粋性を持っていた。「もつと純粋に生きたいです。」と彼は言う。これは心しいきるものの初歩的にして永遠の課題であるので、北原の教育は効果を表していくのである。

「登攀」において作者が強調したい場面は、二人が金剛山に登山するところであり、この作品の題名にも成っている。

再度清書加筆しているとき、何とない作品構成上の不満に、ふと懐かしい金剛山を取入れてみたいと考えた。金剛山は在鮮中、毎夏毎冬、ねぐらのようにもしていた山で、取捨に迷うほどの追憶が群がり湧くのだつた。そして書き始めてから完成したものに『登攀』という題名をつけた。

作者が何となく作品構成上の不満を感じて入れた場面であるが、中心的場面のようになり、小説全体を引き締めている。登山の各場面は描写が細かく巧みで金剛山が良く表現されている。特に頂上付近の書き方は緊迫感があり圧巻である。この小説は教師の体験的実践論であるため、この登山の場面は、それを实际的に証明しているように成っており、テーマを重厚にしている。

彼は岩登りのたびに、闘う相手は自然でも山でもない事を、その都度思い知るのである。何かもつと重大な頂上を越さねばならないとき、彼は山によつてその力を試そうとするのである。北原にとつて登山は人生教育の実践的一環であり、寿善に効果的に作用していく。寿善は実感として体を通して感じる。

僕は今まで、自分の不道徳や怠惰を、みんな環境のせいにしていたのです。然しやろうと思えば、何でもやれるものだと思ひました。今日は痛感したのです。絶望しても闘つていれば、その最後には必ず何らかの光りに到達できるものだと思ひ知りました。はつきり今どうだと云えないのです。然し今日は何年分の修身の時間より、確かに手応えが感じられたように思ひます。

体験的実践的教育が北原の教育であり、小尾十三の教師像であつたと思う。

「登攀」は北原邦夫と安原寿善との人間関係であるが、北原の妻の問題と寿善の家族特に彼の母の問題が重層的複合的に構成されている。寿善の母は怠惰な女性だった。叔父の家では掃除から洗濯まで一切が母の仕事だったがそれが嫌だった。また彼女は淫奔な女性だった。情夫の権平沢に夢中になり子供のことなど全く構わなかった。そんな母を寿善は快くは思わなく、権平沢が母に横柄に振る舞

うのがいやだった。母はそんな息子の白い目を逃れて駆け落ちし同棲した。別れてみると母が恋しくなり叔父に頼んで取り返してくる。しかし母に対する叔父の態度は厳しく三度の食事にまで制限を加えるようになった。このようなとき権平沢が訪ねてきたので、家を出たいと母は狂わんばかりに泣き叫び訴えた。

血走った眼付きの母や権の動作。哀号と叫び続ける精魂つきの叔父。口ぎたなく罵る叔母。これが自分の肉親達の姿なのだ。そう思うと、何か身内の中の心がくづれていき、痛烈かなしみ、が、こんなと胸底から湧き惨んでくるのだった。

母は家を出て行く事なる。この家族の状態の中で寿善は母に同情し母の言うことを聞いたのだった。この彼の決定に叔父は怒り、彼の本を取り上げ警察に知らせるが、母を連れ戻したなら返してやるという。究極的な時点において寿善は北原に相談に来るが、北原は教育者として彼の精神の成長に責任を負わなければならないと考える。この北原の思いに寿善は応えて行くのであり、結局最終的に寿善は母の側に立ち叔父と義絶する事になる。北原の教育者としての自覚は彼をして母の愛に生きる決意を生ましめるのである。寿善の母はいい加減な一方的に性に引かれる女であるが、これを世俗な人間の一人として捕らえている。寿善の伯父は寿善を中学に学ばせ更に進学させようとしているが、身内の中から学問しているものを出すのは肩身の広いことだという家族主義的発想によるもので、当時の朝鮮の世俗主義が表現されている。

「登攀」の最後の「八」「九」はこの作品のクライマックスであり、北原邦夫と安原寿善との心の交流が最も凝縮的に表現されている場面である。寿善の三通の手紙と北原が保田主任と校長に手紙を

書く時の心境と寿善の手紙を存心で読む。『小説に美言の母の事』
寿善が思想的な事件に関わって捕まったことである。

自分は彼の精神の成長を信じている。いや信じているというより、愛するのあまり眠れぬ夜を過ごしている。北原は、神の前にもーという句で、ぱたりとペンを投げた。彼は急に居まいを正し、畳みの上に手をつけて、暫らく見えざる神に、記念を捧げた。

良心的な教育者の最終的な姿ではないだろうか。教育は対人的なものであり、自己が全勢力を上げてその思想と行為を尽くしても相手に応えてくれなければ何にもならなく、相手の成長を期待するしかない。教育は愛であり思想ではない。それを厳密に考えていけば、見えざる神に、記念を捧げるしかないところまで深刻さを増していくと思う。

保田主任からの手紙を受け取った後彼は考えた。

もう一度この愛を知らせてやりたいと思った。この幸福に取
り囲まれながら、もしそれでも彼がひねくれるなら、その時こそ、自分は彼を、救いたいと断念するだろう。いや彼ばかりではない。朝鮮人全体に対して絶望するだろう。

しかし日頃そういう性急な見解に対して気長い忍耐と愛を説き対立してきたので、自分の敗北を予想するようでとても出来そうにないように思えた。教師の良心的な悩みである。真剣に考えれば考えるほど悩むのである。ところがやっと寿善から手紙が来る。

先生、どうぞ私をお見捨て下さい。先生は何と言うくだらぬ人間をお愛し下さったのでしょうか。

との文章で始まり、自分がつとも愛している者は母であり、息子

の自分はある汚濁した汚れている血が流れている。今は亡くなっている母のもとにただ一人の肉親である妹を抱えていきたいという心境が書かれていた。挫折した絶望的なものであった。母の死更に思想問題での取り調べは彼をして深刻な境地へと陥れたことと思われる。

このような手紙を受け取った北原は遂方に暮れ愛とは何か、教育の空しさを感じどうして良いか戸惑うのである。間も無く次の手紙が来る。「先生、何もかもお赦し下さい。昨日の忘恩無礼極る手紙をもお赦し下さい」で始まっていた。

この線からこそ起き上がらねばならぬのだと心が叫びました。生きなければならぬ。負けてはならない。勝つのだ。勝つといて果たして誰にでしょう。それは先生の既にお察し下さる通り、それは実に、私自身に対してです。汚濁した私の血、私の環境に対してです。

最終的に寿善はどん底の状態から再生していく、健全の精神を持つことができるようになる。北原の実践的、体験的な愛の教育によってであった。震えながら鉄梯子を上っていく寿善をぐんぐん引張ってくれた北原の愛の姿だった。

「登攀」は愛の人間教育を扱っているが、それと対立的な北原の妻の不貞の問題が挿入されている。妻米子は教師でありながら生徒を横柄に扱うエゴイストである。人間の行き方として相対的にみようとしているのである。その他当時の転変する時代相が表現されている。

「登攀」は現実主義的な作品である。内鮮一体、皇民化の当時の日本の国策に寄る教育を題材にしたものだが、それはあくまで題材

に過ぎなく、小尾十三の個人的見解における現場の体験的経験的教育であり、現場においての彼独自の教師としてのあり方である。人間対人間の関係の中で教育が成され、相手が精神的に成長していく。その根底を成すものは教育者としての、いや一人の人間としての愛の実践である。内鮮一体、皇民化の当時の教育の中において行われるのであるが、その思想に拘泥せず、人間的な行き方を求めているのである。自己の暗い内面を持ちつつも朝鮮人の教育に人生を賭ける北村、純粋に生きようとする寿善を通して人間愛の教育を主題にしたものである。なお現実の朝鮮人の心の実存を的確に捕らえており、当時の朝鮮人の人々の心が現実的に描き出されている。

二

「雑巾先生」は前作品と同じく舞台は同じく朝鮮の内鮮共学の学校である。労作監督として便所の掃除当番担当の教師にさせられた吉村が、率先して便所の雑巾掛けをしたことによって生徒が付けた綽名が小説の題名になっている。吉村は綽名に対しては飽くまで雑巾でいかなければと思ひ、職務を忠実につくした。翌年三年生の担任になる。吉村はみずから雑巾という綽名を自認し、掃除を通して教育を行おうとした。労作による人間教育は成功し成果を収めていった。吉村のクラスの生徒が国語の時間の作文に「帚と雑巾」という題で書くものまで出てきた。あるとき人夫が石炭を運ぶのを手伝っている生徒を見付けたが、それは吉村の教室の労作を終わった生徒の一部であった。労作を通して働くものとしての共感を抱いたのであり、吉村の蒔いた教育が芽生えだしたのである。生徒は内鮮親しい交わりをせず不快な事件もあったが、彼のクラスからそれがなく

なっていた。労作にお互いが真剣の度を加えてきたからではないかと思われた。

吉村はこのクラスを四年持ち上がりとなる。新四年生は頼もしく成長していった。吉村も心配していたが五年生と四年生の衝突が起きた。五年生の生徒の中から「団結して反抗するんです」「吉村先生が悪いんです」という声が出た。事件が解決した後吉村は自分のクラスへの偏愛的熱意ではないかと考えた。また生徒には心にくぬぼれがあるとそれは目付きになって表われる、上級生には謙虚でなければならぬと論したが、そのように言っているうちに教員である橋本に対する彼等の眼差しについて考えた。自分の心の中に彼への批判があるので生徒は担任教師という自然な情愛から、自分の眼差しからそれを読み取り橋本に対して抗議がましくなっていくのではないかと考え、自分こそ自惚れを抑さえなければならぬと思い、上級生より先生に対して感謝と尊敬を持たさなければならぬと思うのであった。時局の変動により教師の転任転出相次いで、生徒の学校への不信、新任教師への軽蔑となっていく、自分が新任のとき受けた嘲弄を思うにつけ、自分の生徒だけはその影響から、護らなければいけないと思うのだった。

吉村は労作も単なる清潔の段階から美への段階に進むべきだと思つた。これは様々の方法によって実現されていった。東京から来た年輩の先生などその教育に驚いたが彼はまだまだだと思つた。

吉村は教師として生徒の教育について絶えず誠実に考えている。この吉村は小尾十三であり彼の教師としての教育に対する姿勢であると考へて良いと思う。彼の教育に対する理想は知識の充実を目指した教育ではなく人間形成に主眼を置いた人間主義的な人間として

の教育であつた。この事件で五年生の生徒の金村と四年生の生徒の季家昌武を対立的に書いているが、朝鮮人である季家昌武を主人公的にしかも好意的に書いているのは小尾十三の朝鮮人に対する配慮が感じられる。

吉村は四年生の時点で「五年になったらそれこそ先生の理想通りやりますよ」と生徒に言われていた。しかし五年生の担任になることを校長に辞退したが、開校以来二十余年初めて末席者として五年生の担任になる。

労作に関しては完全に吉村の支配下になった。彼は雑巾一枚で教師として寄与することが出来るのもこの時代のおかげだと有難く思ひ、彼等の姿を信じよう、祈るが如く信じようと思つていた。清掃されたのは校舎の隅ばかりでなく、内鮮ともに親しくなり、在学中に別れを惜しむようになった。吉村の教育が効果を上げてきたのであり、彼が自らこの試験に挑んだのは貧しい環境に育つた自分の自らの情であると思ひ、何か大いなる摂理に対して感謝を捧げたいのであった。

吉村の教育の成果は具体的なものとなつて天長節の日に表われた。生徒が清掃し、式場まで作られていた。「吉村さんうれしいうえしゅう。御苦労の甲斐です。教育者の最大の喜びです……」と教師の松浦から言われる。

吉村はうれしくないことはないが、教師たるものの最大の喜びそれがこんなものか、何かが見えてくると、沈む胸の底で見詰めていたものが、現実を果たしてこのようなものだったのだろうか、と思ひ喜悅の思いとは違い彼はかえつて寂しかった。

自分はもっと異なつた方向に——と云つて果たしてそれも何と

解らぬのだが―努力すべきではなかったらうか自分の資質貧しい限界が、努力する事により、もっと素晴らしい方向に伸びるべき彼等の芽を、却って詰んでしまったのではあるまいか。嬉々たる彼等生徒の、上下級仲良い有様は、確かに彼の叱りつけ、手を出す隙は見えなかった。それも却って生徒から勞られていようで、心苦しくさえ感じられた。彼は生徒に悪事を仕込んだように思われ、何らの教育的確信が湧かず、ほとほと遠い己の道のもどかしさに、孤独な想ひに沈まざるを得なかった。

最後の吉村の自己の教育に対しての見解である。吉村は自己の信念にそって教育したのであったが、それを第三者として正しいのか否かを自己に問いなおすのである。自己の教育に対しての反省であるが、教師としての良心であつて教育者としての深い思索が示されている。

東京の私大それも夜間部を困苦漸くの思いで卒業し、……
貧しい履歴が今更のごとく恥ずかしかった。

自分の如き末席者が……

のように自己否定、謙遜的ひかえめな態度が彼の人生觀の基底を成している。彼は赴任して間も無く生徒から雑巾と云う綽名を付けられるのだが、その綽名に対しては飽くまで雑巾で行かなければならないと考えるのだが、この考えを最後まで持ち通す誠実さがある。教師としての誠実さ真面目さ真剣さが、吉村の人生觀の中心になっている。

朝鮮人生徒ばかりがそれほどやられる。

朝鮮人生徒は上下の区別觀念が薄く……

吉村は朝鮮人生徒に関心と愛情を持ちつつも現実の実態を冷静に見

ようとしている。

吉村の教師としてのあり方は小尾十三の教師としてのあり方である。教育の本質的なものを問ひかける作者である。作者には教育は如何にあるべきか、教育者は如何に生きるべきかの問題意識があつた。

「雑巾先生」は教育者の実践を通して、教師の有るべき姿、教育の理念を問題にしたものである。教育は人間対人間の間に行われる相対的のものであるが、その主体は教育する側にあり教育者は常に人間形成の真実の姿に対して謙虚でなければならない。小尾十三はそれを心得ており、彼の教師としての行き方が表現されているのである。この作品は当時の内鮮共学の学校の実態、特に朝鮮人の現実をリアルに書くようとしており、教育者の真実の叫びが吐露されている。「登攀」が芥川賞作品であるのに、単行本で刊行するとき本の題名は「雑巾先生」であり、「雑巾先生」を冒頭に載せ「登攀」を次に掲載している。

本の表題を『登攀』でなく『雑巾先生』としたのは誰の意図だったのだろうか。作者が受賞作より表題作の方をよしとしたためなのか、あるいは満州という特殊の事情が『登攀』のないようにある種の抵抗を示したのか、今となつては分からない。私自身作者に質した覚えがあるが、「それでいいんです」といって多くを語らなかつた。何か悪いことを聞いたような気がして『雑巾先生』の方が装幀文字として納まりがいいんですよなど、おかしいこととお茶をにごした記憶がある⁽⁵⁾。

どうしてこのようにしたのか分からないが、小尾十三は教師としての意識が強く教師としては「雑巾先生」の方が自己がよく表現さ

れていると考えたのではないかと思われる。「雑巾先生」の方が教育者としての理想が具象化されていると思う。「雑巾先生」は芥川賞の参考作品で二作で芥川賞受賞ということであつたらしい。

三

「形見」は単行本『雑巾先生』の中に掲載されている短篇である。新京で防空服装の婦人連中を二列横隊に整列させ防空演習のとき、主人公文江は予備陸軍中尉の協和義勇軍奉公隊長により服装を褒められる。当日の文江の服装は雑巾のように細かく糸を刺した火除け帽子、筒袖にモンペ手甲までつけてしかも全部が地のしつかりした揃いの手織木綿の紺紵だった。

文江の実家は富士見高原であり、母は機織が得意であつたが、娘たちは彼女が織る木綿の着物は嫌いであつた。村祭や諏訪明神の御柱祭などにその着物を着せられると泣いてぐずりだして果ては姉妹相談して祭なんかに行きたくないといったほどであつた。文江は製糸女工にもならず、上諏訪の女学校を卒業すると上諏訪出身で東京の貿易会社に勤務している井手のところへ嫁ぐことになった。種々と嫁入りの着物を揃えたが、母の手織の着物は一枚たりとも持参しなくなかつた。母親が上等の繭から紡いで織ってくれたすべすべした絹のモンペをその土地流に振り袖の裾にはいて上諏訪の結婚式場へいき、東京へいつてから夫に冷やかされたのであつた。東京時代の結婚生活は夫の友達の婦人たちにはモダンな人達が多く、その世界にはかなりの憧憬を抱いていたがしつくりとなじめなかつた。

東京に来てモンペの用意にせまられるようになって、文江は何となく自分の青春を取り戻したような胸の弾みを感じた。あれこれ用

布の選択に迷つた挙句、嫁入りの際母に強いられて持参したものであつた。母は新京赴任の前亡くなり、懐かしい形見になっていた。行李の中から出すと頬擦りしたくなり言い知れぬ感謝の気持ちで一杯になった。モンペを作っただけで青春を取り戻したと感じたのではなく、現在の生活の様々なことが、少女時代の気分を取り戻したのである。これまでの東京時代の生活は彼女にとって恐ろしい虚色偽態であつたと感じるのであつた。主人公は女性の文江であるが、小尾十三である。自分の母への思いを書き綴っているのである。満州という異郷の地での山梨の地にいる母への郷愁である。

東京の姉から戦時下の家族の消息、母の存在による姉の決心の手紙が来る。文江は自分こそ姉に負けずに頑張つたらいの。この時局を真実の日常生活として自分の喜びを子供に伝えねばならない。亡き母の心の手話を、子供達に正しく伝える道はあるはずだ。そしてその行き方を探し、それを子供達へ形見として残してやろう。と思うのであつた。

小尾十三の母は父と別居して甲府市の善光寺で小作人となり養蚕をして子供達を育てた男勝りの女性であつた。彼の教育は母親によってなされたといつて良いと思う。彼の処世観、人間観は母親によって形成されるのであり、この小説の母親は彼の母親であり、それを「形見」として残したいのである。甲府市岩窪に嫁いだ小尾十三の姉に「ふみ」があるが、文江はこの姉の名にちなんで付けたのかも知れない。

四

「新世界」は昭和四十六年六月二十日刊行の芥川賞作家シリーズ

『新世界』のために書下ろした作品である。「登攀」以後の作者の考えを書いたものであり、小尾十三が朝鮮問題への決着をつけたいとして書かれたものである。小尾十三の朝鮮の元山商業学校での体験に基づいた小説であるが、「登攀」とは違い作者の伝記が、より真実に近い状態において書かれている。作者の伝記的歴史小説といっても良いと思う。「登攀」の執筆は昭和十九年であり、統制検閲の厳しい時代であり、小尾十三は自己の世界を書いたとしても、国家権力を意識せずにはいられなかったではないかと思う。昭和三十年後半この作品が執筆されつつある時点で日韓会談が仮調印され、李承晩ラインが廃止された。日韓関係が正常化されていたのである。時が熟しつづあると思われるので、崔聖龜との邂逅について書き誌したい。

「新世界」の冒頭の言葉であるが、「新世界」は小尾十三にとって書くべき時が熟してきたのである。第二次大戦後日本の社会も民主主義の平和な社会となり、経済力も次第に充実してき、日韓両国の関係も正常化してきたので、真実を自由に書けるようになった。全く自由な立場で思いのままに書ける時がきたのである。

小説は虚構の世界であるが、「新世界」はより作者の現実に近い姿勢を取る。「登攀」では主人公北原は中学校勤務であり、東京の私大に在学中郷里諏訪の農民運動に関係して退学されたが、「新世界」では主人公津金の郷里は山梨であり、舞台は朝鮮の元山であり、小尾十三が実際勤めた元山商業学校である。

① 私は予定の通り年内に式をすませ、母や妹の家族たちに新妻を加え、空襲警報に怯えながらも、かなり満ち足りた郷里の正月を味わった。

② 甲府の空襲、……私の家は山沿いであつたが、無人の山に火が移れば却つて危険であり、七十歳を過ぎた母の安否が、とりわけ私の憂いを深めた。

③ 妊娠六か月の妻などには担げもしない重いリュックを担ぎ……

④ 満州の国都新京の食料品製造会社に新しい勤め口を探し当てた。

⑤ 教員検定試験などという、乾いた目的に熱中しているさなかであつた。

① については小尾十三は結婚のために満州から帰っており、結婚式は昭和十九年十月焼ける前の家で行なっており、仲人は小尾範治であつた。②は昭和二十年七月六日から七日にかけての甲府の空襲であり、このとき小尾十三の家は戦災にあつて焼ける。③は

妻は妊娠六か月の身で、石炭車に乗せられ、豪雨に叩かれな
どして、新京から安東まで逃げた。日ソ不可侵条約が突如破棄
され、ソ連は宣戦布告と同時に満州に進攻してきた。

とあるように妻が最初に満州を出かけたときのことであり、④は昭和十八年就職した森永製菓の満州本社である。⑤については正則英語学校の夜間部に学び実業科の教員検定試験を受け、免許状を得ている事と同じであり、小尾十三は自己の実生活を書いている。

この小説は長編小説であり一部二部に別れている。小説の構成は主人公津金が「私」と一人称で進められている。一部は小尾十三である元山商業学校の教員の私が内鮮共学の学校の朝鮮人の生徒崔聖龜との出会い、彼の家族更に彼を取り巻く叔父その他の人々について書かれている。父崔享洛は石油会社から直接仕入れた重油ガソリ

ンを元山を中心に手広く販売していた富翁であった。崔聖龜は音楽の才能があり叔父相淳からバイオリンを習っているが、そのため商業に入ることになる。校内マラソン大会で怪我をして入院する。私はそこで母朴惠淑、姉芳蓮と会う。津金は家庭訪問する。父崔享洛は聖龜に後を継がせたいとおもっていることを語る。朴惠淑の兄の子に神父朴鍾鎬がいたが会いにいき、芳蓮の結婚相手の事について聞く。崔聖龜一家の悲惨な事件が起きる。父の会社である東亜商會が火事になり、父と姉が駐車場で死体となって発見される。二人の告別式の後母は入院し病状は一進一退を繰り返していた。私は時田忠則を級長、崔聖龜を副級長にしたが点数計算で崔聖龜に対して悔いの残る事をする。学内においてラブレター事件、日記事件が起きる。病床の母は遂に死ぬが、崔聖龜は非常に悲しむ。母の死後邸宅を人手に渡し叔父と一緒に住む事になったが、津金には何事も言わなかった。私は元山商業学校を辞め新京の食料品製造会社に転職する。崔聖龜に告げると驚くが納得する。以上が一部の内容である。

「新世界」は津金を通して朝鮮人に対する小尾十三の考えが述べられている。学校では毎朝校庭朝礼が行われるのが慣わしであった。皆がいつせいに「皇国臣民の誓い」を大声で唱えるが、「われわれは皇国臣民なり。忠誠以て君国に報ぜん。」という第一から第五までであった。私は国民服を新調せよと教頭から言われていたが、相変わらず縞のダブルを着ていた。自分が内鮮どちらの民族でもなく、なんとなく異邦人のように思われてきて、内鮮それぞれの眼差しが眩しくなり、朝毎に胸苦しい居たたまらなさを感じていた。人は民族や階級である前に、等しく人間なのだ。このような考えが彼の人生觀の根底を成していた。しかし日常生活においては「津金先生」

と藤が見えずに呼ばれる度に、相手の名前よりも、内鮮どちらかと先ず大別するのが、自分の習慣になっており、朝鮮人だと津金先生になり、日本人だと兄貴のような気分になってしまうのも、津金の偽らざる気持ちであった。彼は形ばかりの融和よりも既に置かれてしまった相互の異なる立場への認識が友情の出発点であると説いた。朝鮮人には彼等の屈辱的立場を、もう一度認識するよう求めた。そこからの脱出が彼等の課題でありその自覚の中に内地人以上の誇りも育つ筈だと説いた。津金の教育は朝鮮人に対しての教育であり、彼等の側に立とうとするのである。毎日志願兵が駅頭を賑して居た。私は「どういふ関係の人が、ああして志願するんですかねえ。」と芳蓮に聞くと

「教育のない人です。」と彼女は不機嫌に答えた。「朝鮮の恥部です。」「恥部」、と聞き咎めて彼女の方を振り向こうとしたが、それよりも自分の顔が赤くなつたのを、隠さなくてはならなかった。教養ある若い女性としては臆面もない表現だ。だがふとその言葉に拘泥してみると言い得て妙かも知れないと思われた。大和民族の恥部と朝鮮民族の恥部。そこに誕生したもの、私たちが含めた、現実の今見るこの町の風景かもしれないのだ。

この私と芳蓮の会話を津金の考えが、いや小尾十三の考えが述べられている。芳蓮に「教育のない人です。」と言わせ「朝鮮の恥部です。」とも言わせているが朝鮮の若い教養人の言葉であり、彼自身「大和民族の恥部と朝鮮民族の恥部。」とはつきり言っているが、これまた日本の教養人の言葉であって、共に高踏の見解であって新しい考えである。このようなことは「登攀」執筆においては言えな

かった。作者小尾十三の進展である。朝鮮人の反日性、日本人から見た朝鮮人の恥部を大胆率直に捉えているのである。

小尾十三は朝鮮人の側に立とうとするが、彼等に一边倒になっていのではない。芳蓮を評価し、その美しさを賛美するのだが、彼女を次のようにも捉えている。

生ニンニクの臭いが私の鼻を衝いた。私は、うッ、と叫び出す息を休めて、不自然、無礼をどのようにか繕いながら、光りから顔をそむけた。……………

チン、チン、と二度、ごく微かな音を立てた。束の間、真偽を疑ったけれど、それは確かに手漣の音に違いなかった。……

……

ニンニクも手漣も彼女に何の罪がある訳ではなく、また無論、文化のパロメーターである筈もない。にも拘らずそれは……………私を、冷やかな笑い声で追いかけてきた。

小尾十三は客観的立場に立とうとし、第三者的に物事に対していこうとしている。作家としての文芸的姿勢を貫こうとしているのである。

第二部は新京の食料会社の内外の状況から始まる。崔聖亀から内地の否定的な数々の事を書いた手紙が来る。読み終えた私は穴蔵へ落とされたような気になり、いたたまれない羞恥心を感じる。しかし羞恥心よりも同胞に対する憎悪が先に燃えないのはなぜだろう。それに気付き愕然とする。この津金の気持は小尾十三である。私は返事を書く。次の手紙は長い間来なかったが、東京の学校に行くことを断念した。新京に音楽関係の仕事はないか、音楽の勉強をしたいとの手紙が来る。私は就職探しに奔走した結果、放送局のレコー

ド係に採用され、崔聖亀は新京に来る。初仕事に新世界第二楽章を独断で流すというミスを犯す。津金が結婚のため山梨に帰っているうちに友達のおバーを盗んで警察へ連行される。私は謝罪に走り回り、その甲斐あって釈放される事になり、法院にいき連れて帰る。家で手厚く持て成したが、間も無く熱を出す。医者は発疹チフスといふので入院させる。退院後楽団庶務課へ就職し、新京とハルピン交響楽団の合同演奏会に出演することになる。彼は切符を二枚持ってきたので私達夫婦は出席する。私は崔聖亀の演奏している姿を目を細めて見直さざるを得なく、また拍手を浴びる彼を見て

人の子の親、人を教えた者、ひいては人類のすべてが、ひたむきの夢の追及の果てに、喜悅の裏側で噛み締めるものはこんなものか、と思わずにはいられなかった。

私は崔聖亀の面倒を見自分にできる限りの事をした。私のかれに対する配慮は大変なものであり、彼に対する愛の生活を実践的に行ってきた。小尾十三の人間に対する献身的な愛の姿勢である。

この作品のクライマックスは最後にある。最終的な時点における崔聖亀の身の処し方と、それに対する私の心のあり方である。ここにこの作品の主題がある。昭和二十年八月八日新京は初めて空襲され、ソ連が対日戦線を布告した事、広島へ新型爆弾を投下した事を告げられ、新京は大変な騒ぎとなる。崔聖亀は訪ねてきて元山に逃れる事を勧める。八月十五日以後新京は満人暴動の町と化してしまふ。日本人の誰もが言葉を失い死人の顔色をして逃げていく、暴動が日本人宅を襲っている等々……………敗戦時の新京をリアルに描いており、その描写は巧みである。

彼はもう日本人ではない日本の長い統治から開放された、独

立国の国民なのである。束の間、私の全身を、激しい虚雜感が襲った。だがすぐに、彼にこそ、今日の悦びの握手を呈しなればいけないのだ。

私の現時点における偽らざる気持ちである。家の前は人通りはなく、小さな赤旗が戸毎に飾られ、放送局も楽団事務所も連絡不能になり、満人街の日本人は千五百人ほど殺されたといわれた。崔聖龜の背広姿をそのような時に見かけたが、その頃はソ連兵の略奪が昼となく夜となく行われ日本人住宅を脅かしていた。崔聖龜はそんな中ソ連軍の報道本部に行き、番兵に手帳のようなものを見せ中に入ってしまう。その僅かな間の一部始終の光景は、棒立ちとなり、固唾を飲んで見守っていた私の胸に、耐え難い疼痛を伴って焼付けられた。彼が今や松原砂男ではない。私は強烈な印象で思い知らされるのである。

数日後崔聖龜が訪ねてきた。私は知人から頼まれた反物を持って捌き、口銭を儲けて、その金勘定をしていた。

僕、お金を借りに来たんです。すみませんが五十円貸して下さいませんか。

私は有り金全部渡しても崔聖龜なら悔いる事はないと思ひ五十円渡したが、その時がこの世で彼の姿を見た最後であり、その言葉が最後の言葉であった。彼は朝鮮に帰ってしまう。朝鮮に帰ったら、一番先に新世界を放送すると友達の前仁良に言う。思いがけず飛び出した新世界と言う言葉は私の虚脱感を、なお土足で踏み付けた。

私は生きなければならぬと思った。それには先ず、崔聖龜を赦さなければならない。赦すためには私の彼に対する、同じような非を数える必要がある。

「新世界」の私は小尾十三の真実の心が表現されている。朝鮮人に対する思いやり、愛の実践を体験的に追及してきたのであるが、最終的にその愛は赦しでなければならないことに行き着く。愛の行為においても、自己の行為は自己中心的になるものであるが、その自己を改めて問い直す。最終的に自己中心的なもののより脱皮していくことが、大切なことであることを悟るのである。

崔聖龜の最後の言葉と行動は一体何を表わそうとしているのかがこの作品の鍵になっている。彼は最後の別れを言いにきたのである。崔聖龜の目尻に淡く水色に光っていたものは涙だったのだ。日本の国策としての朝鮮政策は内鮮一体、皇民化の教育であり、非人間化的のものであった。崔聖龜の最後の言葉と行為はこれに対する反抗である。彼は若くそのなすべき行為というべき言葉に迷っていたのである。

その彼の心情に立てば、敗戦の痛手が尚生血を吹き続けている私との永別に、何といえはよいだろう。金竜光のような大言壮語を述べなぞしたなら、痛手になおあいくちを突き刺したまま、一生置き去りにするようなものである。

この言葉を理解しなければならぬ、内鮮一体、皇民化の教育の罪の大きさを考えなければならぬ、新しい世界においては葬り去らなければならないが、日本人は飽くまで日本人であり、朝鮮人は朝鮮人であるとの考えに立っている。敗戦の痛手は日本人にとっては思想とは突き放して感情的に打撃となるのである。

小尾十三の文学は特定のイデオロギーとか国策の批判というものはない。その思想やおかれている国策の中で歩むのである。しかしその中で許されるかぎりにおいて人間らしく生きようとするのであつ

て、相手の立場に立ち、愛の実践を行うのである。小尾十三は彼の考える限りの愛の教育をするが、個人を越えた民族の問題、国家の問題も考えざるをえなくなってくる。各人は同じく人間であるが、それぞれの民族国家の一員であるとの自覚がある。崔聖龜には覚めた新しさがある。

小尾十三は個人的・人間の問題として崔聖龜を許そうとする。自己の非を先ず考えるのである。愛の精神は進展を見せ反省を伴って許しにまで至るのである。しかしそれは必然的・暗示的に国策の批判として読者の胸を打つのであり、ここに小尾十三の文学の世界の進展がある。

「新世界」の二部の後半では第二次大戦終末時の戦況による新京の街の状況を詳細にリアルに伝えている。風俗小説的な一面を持っている。演奏会に来ているドイツ大使館の人々が「運命」を聞いているのを書いていますが、印象的である。

なお彼の音楽的教養が随所に見られ、小説全体がドボルザークの「新世界」に包まれているように表現されている。初めに新世界の第二章第一主題「家路」を提示し、最後が第五番になっている。崔聖龜に取っては新世界への船出であり、また人間愛によってきた作者にとっても新世界を期待しようとするのである。

五

小尾十三の作品で以上述べたもの以外には次の作品がある。

「浪花節」（『雑巾先生』掲載）、「列車劇場」（『文芸読者』掲載）、「牧歌」（『新農民文学集』掲載）、「からの親子」（『甲府市史』史料編第七巻現代Ⅰ掲載）、「燈火」（未発表・原

稿用紙）、「長春」（未発表・原稿用紙）、「怨恨」（未発表・原稿用紙）、「赤軍進駐の周辺」（未発表・原稿用紙）、「しつけ糸」（未発表・原稿用紙）、「青い林檎」（未発表・原稿用紙）、「青き大表畑にて」（未発表・原稿用紙）等である。

小尾十三の文学の根底を成すものは人間性である。愛の精神であり、人間としての誠実さであり、謙虚さである。人間を信じ、人間を愛した文学が小尾十三の文学である。彼の文学は自己の偽らざる表現であり、絶えず現在の自己の考えが出ている。現実主義の文学であり、自然主義の正統的な作家である。

この人間形成、作家としての形成はいかなるところから生まれてきたかが問題になる。小尾十三の父角太郎は北巨摩郡江草村の生れであり、母はなは北巨摩郡津金村生まれの飯島はなである。二人は結婚当初北巨摩郡穂足村大豆生田で国定教科書販売店を営んでいた。小尾十三はここで生まれるのである。小尾十三の精神構造の基底を成すものは八ヶ岳南麓の人間の精神構造が基本になっていると思う。

父角太郎は囲碁に凝っており、甲府市に移り住み碁会所を始めたが、母はなは遊び人相手の父の職業を好まず、甲府市郊外の善光寺に土地を借り、子供を育てる。娘時代に埼玉県などで篠桑育の養蚕を勉強していたので、以後二人の妹が生まれたが、父からの扶助もなしに養蚕で子供達を教育したのである。小尾十三を考える場合この母の存在なくして語ることは出来ないのではないかと思う。小尾十三の教育は母によってなされた。

家族は十三さんの他には、地味な格好をした年配の女性が一人きりだったように覚えている。十三さんがその女性のことを

「これが私の一番自慢している母親です。どうか宜しく」と横光利一に紹介した。

彼は母親を尊敬し自慢していた。「私には母譲りの、パカキマジメの性格がある」と彼自身言っているように母の性格とその教育は小尾十三の人間形成の原動力となっている。

人間は人間らしく生きることが最も大切だ、……偉い人とか、金持ちとか人気者になろうと憧れてはいけない。

母親はこのように教えている。小尾十三の精神構造の基本は母親によって形成されるのであり、それが彼の文学の文芸性を決定し、文芸精神となっているのである。

私は、思想性とはイデオロギーではなく、人間性だと思っている。さらにいえば、私の思想性は、田舎性であり土着的であり、私は住居も、できるだけ農家的なたちをとって住んでおり、作品の文章も田舎的に書きたいと思っている。

小尾十三自身このようにいっているように、彼の文学の本質性は人間性であり、それは母親を中心とした山梨の田舎性によって形成されたのである。

注

- (1) 佐藤春夫「第十九回芥川賞選評」芥川賞作家シリーズ『新世界』学習研究社 昭和四十年六月
- (2) 山梨日日新聞昭和二十七年八月十六日二五九三四号
- (3) 田野辺薫「小尾十三の作品―人間性の体温を描く―」芥川賞作家シリーズ『新世界』学習研究社 昭和四十年六月
- (4) 小尾十三「芥川賞の思いで」『校内誌』昭和二十六年八月
（『ひとりっ子の父』再掲載）
- (5) 式場俊三「芥川賞戦中私語」第十九回芥川賞受賞作「登攀」収録雑巾先生刊行のしおり 中野書店刊 昭和六十二年八月
- (6) 小尾十三「人生を愛し愉しむ教育」『ひとりっ子の父』第三文明社 昭和五十六年十月
- (7) 井伏鱒二「戦中の頃」『ひとりっ子の父』第三文明社 昭和五十六年十月
- (8) 小尾十三「母への反抗時代」『灯台』 昭和五十四年
（『ひとりっ子の父』再掲載）
- (9) 田野辺薫「小尾十三の作品―人間性の体温を描く―」芥川賞作家シリーズ『新世界』学習研究社 昭和四十年六月
（市史編さん委員）